

百人一首を書きましよう。

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の

われても末に逢はむとぞ思ふ

崇徳院

淡路島通ふ千鳥の鳴く声に

いく夜寝覚めぬ須磨の関守

源兼昌

秋風にたなびく雲のたえ間より

漏れ出づる月の影のさやけさ

左京大夫顕輔

ながからむ心も知らず黒髪の

乱れてけさはものをこそ思へ

待賢門院堀河

【現代語訳】

川瀬かわせの流れが早いので、岩にせき止められた急流が二つにわかれてもまた一つになるように、貴方と別れてもいつかはきっと逢おうと思う。

【現代語訳】

淡路島あわじしまから飛び通う千鳥の鳴く声に、いったいいく夜を覚ましたことだろう、須磨すまの関守は。

【現代語訳】

秋風に吹かれてたなびいていく雲の切れ間からもれ出てくる月の光の、何と澄み切った明るさであることか。

【現代語訳】

貴方の愛情が長続きするかどうかわかりませんが、寝乱れたこの黒髪のように心も乱れている今朝は、物思いに沈んでおります。